

鎌倉時代の公武婚

鈴木 芳道

問題の所在

日本中世の支配者層に関する議論は、日本中世国家史研究の二大潮流といわれる、武家発展史論と公家・武家・寺社三者の相互補完論に集約される。後者に拠らないと理解しにくい事象が数多く紹介されて、今日では前者の退潮の感も否めないが、否定し去られたのではなく、むしろ両論に学びつつ両論対立の克服を目指すべき段階にあるといえよう。こうした研究状況の中で意外に等閑に付されている事象として公家と武家との婚姻があげられる。既に東国御家人と京幾人との婚姻を問題視した研究はあるが、この事象を主題として網羅的に言及した研究は、近年の五味彦氏の研究を待たなければならなかった。しかし五味氏の研究は「縁」をキーワードとした幕府要人と京都人との個別的な縁故関係の集積であり、公家と武家との婚姻として一般化が果たされているとはいえない。この点で同じ頃に示された、建久二年（一一九一）の九条良経と源頼朝の姪、一条能保女子との婚姻を「婚姻形態の変化——公家と武家との婚姻——」とした服藤早苗氏の位置付けは、この事例を真に公家と武家との婚姻とする事には従えないが、重要な指摘である。

私は別稿において藤原定家のいう「斉之婚」に導かれ、公家と武家との婚姻を公家同士や武家同士の婚姻とは異なった型態のものとみなして、これを「公武婚」と呼んだ。「斉」字には「そろふ・ひとしくする・同じくする」

表 1 武家女子が公家に嫁した例 I (非北条氏)

公 家	武 家	成 立 年	生 子 生 年	妻 室 備 考	典拠
一 条 高 能	槽谷有季女子		能氏		尊
綾小路師季	稲毛重成女子		女子、元久元(1204)		吾
阿野公佐	阿野全成女子		実直、承元3(1209)		尊
藤原隆仲	〃		?、嘉禎元(1235)4、22以前		尊
四 条 隆 綱	大内惟義女子		隆行		尊
水無瀬親兼	足利義兼女子		隆顕		尊
四 条 隆 親	足利義氏女子		顕実、文永3(1266)7、4以前		公、尊
土御門頭方	吉良長女女子		為氏、貞応元(1222)		尊
藤原為家	宇都宮頼綱女子		?、嘉禎元(1235)4、22以前		明、公
三 条 実 房	〃		通頼、仁治3(1242)		宇
中 院 通 成	〃		光雄		公、尊
日 野 資 宣	小笠原長房女子		季顕、天福元(1233)12、27以降		尊
藤原親季	三浦義村女子		教定		尊
飛鳥井雅經	大江広元女子		〃		尊
滋野井実国	〃		実光、建仁元(1201)		尊
徳大寺公国	〃	正治2(1200)11、14以前	基有		公、尊
源 雅 具	中原師員女子	嘉禎元(1235)3、25以前	愼子内親王		明
藤原基氏	大友親季女子		大僧正道瑜		大
後 嵯 峨 院 実	〃		資緒王、建長2(1250)		大
二 条 良 王	〃		道直		大
資 基	〃				菊
二 条 道 平	菊地時隆女子				

典拠：尊…『尊卑分脉』 吾…『吾妻鏡』
 公…『公卿補任』 明…『明月記』
 大…『大友系図』『統群書類従』六上
 菊…『菊地系図』『統群書類従』六上
 宇…『宇都宮系図』『統群書類従』六下

等の意味があり、「一定のますめによ
 つてつくった混和酒」「まぜあわせた
 製菓」をも「斉」という^⑤。従って「斉
 之婚」とは公家と武家との混和婚・混
 合婚、即ち「公武婚」ということにな
 るのである。別稿では、鎌倉前期に行
 われた武家女子が京都の公家に嫁した
 一例と、公家が鎌倉に下向してかの地
 で武家女婿となった一例を取り上げ、
 その具体像を明らかにする事に努めた。
 本稿では鎌倉時代の公武婚事例をでき
 うる限り拾い上げて通覧する事とする。
 壮語を許されるならば、それが中世国
 家史、延いては日本中世史研究に寄与
 すると考えるからである。

検出した公武婚事例の類型化には
 様々なパターンがあると思うが、本稿
 では以下の通りとした。まず公家女子
 が武家を夫としたパターン(表3)と

表 2 武家女子が公家に嫁した例Ⅱ（北条氏）

公 家	武 家	成 立 年	生 子 生 年	妻 室 備 考	典拠
三 条 実 宣	北条時政女子	元久元(1204) 4 以前	男子、建保元(1213)	生母牧方	吾、明
藤 原 国 通	〃	元久 2 (1205)以降か		旧夫平賀朝雅、生母牧方	尊
松 殿 師 家	〃	天福元(1233) 5, 8		旧夫宇都宮頼綱、生母牧方	明、尊
坊 門 忠 清	〃				人
一 条 実 雅	北条義時女子	承久元(1219)10, 20	女子、承久 4 (1222)	唐橋通時再嫁、生母伊賀朝光女子	吾、尊
土御門定通	〃		頼親、承久 2 (1220)	旧夫大江親広、通称竹殿	明、平
唐 橋 通 時	〃	嘉禄元(1225)11	通清	旧夫一条実雅	明、尊
西園寺実有	〃	安貞元(1227) 7, 8	公持、安貞元(1227)		明、公
藤 原 実 春	〃				人
一 条 能 基	〃				人
一 条 高 能	北条時房女子				人
一 条 頼 氏	〃		能基、承久 3 (1221)		尊
藤 原 実 任	〃			旧夫長井時広	人
藤 原 実 春	北条泰時女子			(義時女子と混同か)	人
源 通 俊	北条朝時女子				尊
源 具 親	北条重時女子		輔通		尊
唐 橋 通 時	北条実泰女子				人
九 条 忠 嗣	〃				人
唐 橋 通 清	〃			「雅世朝氏妻」通清本名雅世	人
飛鳥井教定	北条実時女子		雅有、仁治 2 (1241)		公、尊
飛鳥井雅有	〃		雅頼		尊
藤 原 実 直	北条時村女子				人
藤 原 公 直	〃				人
唐 橋 通 清	北条為時女子				人
藤 原 光 氏	北条時盛女子		頼憲		尊
葉 室 定 藤	北条時親女子		公定		尊
洞 院 公 守	北条久時女子		実明		尊
藤 原 公 蔭	〃		忠季、元享 2 (1322)		尊

典拠：尊…『尊卑分脉』 吾…『吾妻鏡』 平…『平戸記』

公…『公卿補任』 明…『明月記』

人…『吾妻鏡人名総覧』（註 8）

表 3 公家女子が武家に嫁した例

公 家	武 家	成 立 年	生 子 生 年	妻 室 備 考	典拠
水無瀬親兼女子	大 友 親 秀			旧夫源通光、惲子内親王祖母	尊
飛鳥井雅経女子	安 達 義 景		頼盛、嘉禎元か寛元 3		尊
源 通 親	三 浦 泰 村		男子、寛元 4 (1246)		吾
綾小路繼宣女子	三 浦 景 明				関

典拠：尊…『尊卑分脉』

吾…『吾妻鏡』

関…湯山学『関東祇候の廷臣』（註20）

表 4 将軍家の公武婚

公 家	武 家	成 立 年	生 子 生 年	妻 室 備 考	典拠
坊門信清女子 藤原頼経嗣 藤原頼嗣	源実朝 源頼家女子 北条時氏女子	元久2(1204)10 寛喜2(1230)12.9 寛元3(1245)7.26	若君	生母源義仲女子 生母安達景盛女子	吾 吾 吾

典拠：吾…『吾妻鏡』

武家女子が公家を夫としたパターンに分け、後者では件数のほぼ半数を武家側が北条氏の事例が占めており、これを北条氏(表2)と非北条氏(表1)に分けた。前者は希少で北条氏の例はなく、件数上は後者のパターンが前者のそれを圧倒している。さらに右のうち、夫が将軍である例を独立させてこれをひとつ(表4)とした。以下一覽に従い鎌倉期の公武婚を概観し、最後にその成果の上に立ち所見を述べたい。なお本稿では武家を将軍と御家人・陪臣およびその家族の総体とする。

第一章 武家女子が公家に嫁した例Ⅰ

——武家側が非北条氏の場合——

鎌倉期の公武婚は、検出される限りにおいては武家女子が公家に嫁するを例とし、うちはほぼ半数を北条氏が占める。そこでこのパターンの検出事例を北条氏と非北条氏に分け、本章では後者についてみる事とする。表1はその一覽であるが、婚姻成立年や生子生年が不明な事例が少なくなく、記載は成立順を理想とするも女子の父にまとめるに留まった。

① 一条高能——槽谷有季女子

一条高能は能保の嫡子。母は源義朝女子、即ち源頼朝同母の「妹」である。高能は建久九年(一一九八)九月、二十三歳の死去だが、四人の男子はいずれも母を異にし、有季女子も生年未詳の能氏を得ている。高能の武家妻室には他に北条時房女子がいる。時房は高能の一年年長にすぎず、時房女子は幼年で父とほぼ同年の男性に嫁した事になる。

高能は同元年十二月に京都守護の父の下六波羅留守に任じ、同五年八月には鎌倉に下り、

「旅館不及他所、坐小御所」したという。頼朝は女子大姫を高能に嫁せようとしたが、大姫は拒んだ。閏八月一日の頼朝三浦渡御には高能が相伴し、足利義兼・北条時政以下の御家人が扈從した。ここには、鎌倉での頼朝と高能さらに義兼・時政以下の御家人との関係性が示されている。高能は公家として頼朝と御家人との主從制の外部に位置し、さらに頼朝「妹」の子「將軍家御外甥」として遇されていたのである。また能氏は建暦三年（一二一三）正月に「参着」する。京都からであろうか。同年五月の和田合戦の際には戦火を避けて涼地を求めている。能氏は既に同年には侍從となっており、建保七年（一二一九）正月の將軍実朝右大臣任官拝賀鶴岡参社には他の一条家等一〇人の殿上人のひとりとして参列している。有季女子が高能に嫁した事情は不明だが、有季は比企義員女婿であり、義員・有季は建仁三年（一二〇三）の比企の乱で死去したが、源頼家外戚として威勢を振っていた義員が將軍家の親族一条家との縁を求め行つたとの想定は無駄ではなからう。

②綾小路師季―稻毛重成女子

この婚姻は元久二年（一二〇五）十一月に二歳の師季女子が尼御台所北条政子の意により鎌倉入りしたという記事により知られる。稻毛重成は同年五月の従父兄畠山重忠が北条時政・牧の方夫妻の謀略により滅ぼされた際に親族の好で与同し誅殺され、乳父母も隠居したために師季女子を不惑とした政子が呼び寄せたのである。政子は彼女を猶子として父の遺領を与え、建保六年（一二一八）二月の上洛に同道させて源通親の子土御門通行に嫁がせた。^⑩のち彼女は参議通時を得、孫の通尚は「住閑東」した。^⑪

③阿野公佐―阿野全成女子

④藤原隆仲―阿野全成女子

源義経同母兄全成は建仁三年（一二〇三）に謀反の容疑で誅殺される。公佐嫡子実直の誕生はその六年後の事であるから、公佐婚成立に全成が干与していたとは言い切れない。全成死後の成立とすれば、全成女子は父の死後も

源義朝孫女、頼朝姪として然るべく遇されていた事になり、御家人の妻室になるような立場にはなかったと思われる。公佐養父滋野井美国に嫁した女子のひとりに、所生の子は確認されないが大江広元女子がいる。公武婚には幕府関係者の干与を想定するが、そうした者として広元をみる可能性はある。また公佐には全成所生の実直の他に、源通親孫で後鳥羽院女房擦察局を生母とする堀川具実に嫁した生母未詳の女子がいて、注目される。

⑤ 四条隆綱―大内惟義女子

⑥ 水無瀬（坊門）親兼―足利義兼女子

⑦ 四条隆親―足利義氏女子

⑧ 土御門顯方―吉良長氏女子

⑨ 日野資宣―小笠原長房女子

武家方はいずれも清和源氏である。文治元年（一一八五）八月十六日の小除目では新田義範・大内惟義・足利義兼・源遠光・安田義資・源義経が受領となった。勅定に従った義経を除く五人の分は彼らの懇望を受けた頼朝の推挙によるもので管国はすべて関東御分国の内である。¹³ 新田・足利は義家―義国流、他は義家弟義光流であり、幕府内で源家嫡流に次ぐ格式を認められた事になる。右五例の女子の父のうち、惟義・義兼は文治元年の受領補任に与り、義氏・長氏は義兼の子孫、長房は秋山・小笠原氏の祖遠光の曾孫である。

大内惟義については田中稔氏の研究¹⁴がある。惟義は正治元年（一一九九）二月の三左衛門事件あたりから在京伴類の追補が命ぜられるなど在京御家人としてあり、加え源氏一族の長老としても在京御家人の内でも高い地位に置かれていた。建保二年（一二二四）四月の園城寺焼亡の翌月の造営工事では奉行として宇都宮頼綱ら有力御家人を指摘している。この頃は京都守護が置かれていたとはいえ、幕府は在京御家人に直接命令を下す例が多く、惟義はそうした在京御家人の代表的な存在であった。

四条隆綱と四条隆親は兄弟である。本郷和人氏はふたりの婚姻を父隆衡の所為と推測する。⁽¹⁵⁾ 四条家は兄弟で將軍家に次ぐ高い格式を誇る関東および在京の有力御家人の婿となつたのである。惟義は在京人であり、隆綱室も京都を動く必要はないが、隆親室は上洛してものだろう。その後隆親は関東申次とは異なる独自の情報源を有し後嵯峨上皇近臣として威勢を振つたが、それは義氏ルートをいうのか。

水無瀬親兼は後鳥羽上皇寵臣で、承久の乱後に上皇に従ひ落飾している。足利義兼は建久十年（一一九九）に死去しているが、親兼婚は後鳥羽上皇と將軍源実朝の密月時代から降りるものではないだろう。また義兼女子は上洛して親兼に嫁したと思われる。

吉良長氏は足利義氏の子、土御門顯方は土御門定通猶子で、中院通方四男である。⁽¹⁶⁾ 顯方は建長四年（一二五二）三月の宗尊親王に従い、同行女房のうちには通方女子一条局、源通親女子西御方があつた。⁽¹⁷⁾ 翌月に宗尊親王は將軍となるが、祖父土御門、父後嵯峨とこの系統は源通親とその子孫に護られていた。

顯方は宗尊親王が鎌倉を追われる文永三年（一二六六）七月まで公卿として最も彼に近侍した側近であり、この間官職は参議から大納言へ、官位も従二位へと昇つていった。⁽¹⁸⁾ 顯方は鎌倉にあつては將軍に次ぐ格式を誇つていたのである。鎌倉幕府の職制は將軍をトップにその下に執権があり、権力の実態としては北条得宗家がこれを掌握していたが、將軍のもとには顯方のような公家が近侍していた。こうした將軍近侍の公家は、源家時代には各種儀礼に京都より下向し参列する程度であつたのが、摂家將軍・親王將軍の時代になると常時將軍に近侍する公家がみられるようになる。⁽²⁰⁾ 私は、こうした將軍近侍の公家の存在は、將軍が天皇權威と不可分のものであり、彼らの將軍への近侍が、將軍に対して天皇權威を裝飾するものであつたと考える。この婚姻の展開は明らかにしえないが、長氏女子が義氏の姪、足利氏の女子である事に留意したい。

小笠原長房は源遠光の曾孫である。遠光の子小笠原長清が承久の乱で軍功を立て阿波国守護となり、以後かの職

は子の長清、孫の長房と継がれた。資宣と長房女子との子光雄は、小笠原（甲斐国）に住すとも日野（山城国）に住すともいう。²¹

⑩ 藤原為家―宇都宮頼綱女子

⑪ 三条実房―宇都宮頼綱女子

⑫ 中院通成―宇都宮頼綱女子

宇都宮頼綱には三人の公家に嫁した女子がある。このうち最も早くに成立したのが為家婚である。為家婚については為家の父藤原定家の日記『明月記』が多くを伝えており、これに依拠した論及が古くからなされている。²²私も京都における公武婚の具体像を知る唯一の事例として取り上げており、²³詳細はそれらの研究に譲るとして、本稿では重複を避け得ないものの要点を押さえておきたい。

為家婚成立時の動向は不明である。一男為氏は貞応元年（一二二二）の生まれだが、『明月記』は承久二年（一二二〇）から元仁元年（一二二四）を欠いているからである。この頃の頼綱は京都に居を構え、家督を一男泰綱に譲った隠居であつた。頼綱と未来の為家室は既に在京人とみてよく、女子が公家との婚姻の目的に関東から上洛するケースには当らない。²⁴為家夫妻は元仁元年時には冷泉亭に居しているが、定家夫妻は冷泉亭を離れて京極亭に移っている。カマド禁忌に基づくもので、為家婚は夫方の両親避居に伴う夫方居住婚となる。²⁵定家は文治二年（一一八六）から九条家に家司として仕え、建久五年（一一九四）頃には前妻と離別して西園寺実宗女子を娶り、実宗女子との間に得た為家を元久二年（一二〇五）に九歳で実宗加冠により実宗嫡男公経の猶子とするなど、親幕派の上流公家と結んでいた。定家は北条氏から妻室を迎え栄達をみた藤原国通や三条実宣にあやかうと為家と頼綱女子との「齊之婚」²⁶を決心したのだと嘉禄二年（一二二六）六月の実宣の聳取りに寄せて記す。この段階でそのように記していることは、定家の為家婚に対する意図が幕府を背景としての為家栄達の一点にあるという他はない。

公武婚による姻戚交流の現象という点では隠居の和歌愛好家頼綱よりは、彼の嫡男泰綱の動向に目を向けたい。泰綱は郷里（下野国）より名馬を冷泉亭に送り届けるなど武家らしさを以て冷泉亭を訪れ、定家も九条家への進上馬の調達を泰綱に依頼している。石清水八幡宮寺領薪荘と興福寺領大住荘との水論につき興福寺衆徒が八幡領を焼き払うとの風聞を受けて六波羅より出向した「武士」の中での泰綱の勇者ぶりと戦装束の美麗さや、泰綱女子と執権北条泰時の嫡孫との縁組が約束された事も『明月記』は伝えている。

両家の交流は『明月記』以後宇都宮歌壇の形成へと向かう。宇都宮歌壇は為家一男為氏の下に二条流の歌風を掲げ、為氏の宇都宮にての編と付されている『新和歌集』⁽²⁷⁾に結実した。⁽²⁸⁾

頼綱の女婿のひとりとされる三条実房は、文治元年（一一八五）に頼綱の定めた議奏公卿のひとりで、嘉禄元年（一二二五）に七十九歳（八十二歳とも）にて死去している。⁽³⁰⁾ 頼綱は治承二年（一一七八）の生まれだから、実房の方が三十歳程度年長で婚姻の事実が疑問に思われる。事実とすれば頼綱女子幼年時か実房晩年の時だろう。

中院通成は仁治三年（一二四二）に頼綱女子との間に通綱を得る。通成は『新和歌集』の歌人のひとりである。⁽³¹⁾

⑬ 藤原親季―三浦義村女子

三浦氏は幕府創業以来の重臣で、義村は嘉禄元年（一二二五）十二月に評定衆に列し、没するまでの一四年間は幕府の中枢に参画して『御成敗式目』制定にも参与した。『明月記』天福元年（一二三三）十二月二十七日条には「親季、成茂娘去月離別了、関東女多入洛、聞之、月卿雲客多与妻離別云々、隆盛少将切八幡妻髪、凡近日壮年人々所存皆同云々」とあり、関東御家人の子女が数多く上洛し、ために多くの月卿雲客が妻室を離別している事を伝えている。むろん女子の上洛は公家婿を得るためであり、月卿雲客の離別も御家人の子女を妻室とするためである。藤原親季もこうした同卿雲客のひとりであった。但し親季がこの時に義村女子を妻室としたかについては可能性を指摘するに留まる。

⑭飛鳥井雅經—大江広元女子

⑮滋野井実国—大江広元女子

⑯徳大寺公国—大江広元女子

大江広元は局務家中原氏の出身で、文筆の才を買われて鎌倉に下った。広元は多岐に渡り諸政策を献策し、幕府の基礎固めを行った。正治二年（一二〇〇）正月四日の焼飯は広元の催しであった。この年は一日北条時政、二日千葉常胤、三日三浦義澄、五日八田知家、六日大内惟義、七日小山朝政、八日結城朝光と行われており、広元が彼らに比肩する有力御家人であつたことが理解される。武士ではない筆を以て幕府に仕える京下り官人も文士として御家人に数えられたのである。

和歌・蹴鞠の家に生まれた雅経であるが、かつて父頼経が義経に同心して伊豆に配流され、兄宗長も解官となつた。雅経婚成立事情も不明である。頼家は蹴鞠を殊更に愛好し、鎌倉にて宗長を厚遇した。⁽³³⁾ 頼家死後の雅経は和歌を以て実朝と結ぶ事になる。雅経は建仁元年（一二〇一）三月に関東より帰洛して⁽³⁴⁾ おり、これ以前には鎌倉に下向していた。雅経と広元との関係が示されるのは、雅経が藤原定家より付された歌書を鎌倉に届け、広元が実朝の閲覧に供している事である。建保元年（一二二三）八月には実朝の尋ねに応えた定家が「双紙」等歌書を雅経に付し、これが広元亭を経て御所にて実朝の興に入れられた。⁽³⁵⁾ 十一月には定家は雅経を以て「相伝私本万葉集一部」を実朝に献上している。鎌倉に到着するや広元は御所にて実朝の賞翫を得た。⁽³⁶⁾ 歌書は広元の手を経て実朝の目に入れられており、雅経自身が鎌倉に足を運んだものとはいいい難い感もあるが、遡る同年七月には定家は雅経と「自関東被示草子等」⁽³⁷⁾ について話し合いをもっているから、少なくとも定家の実朝への和歌指南は雅経を通じてなされるものであり、実朝の意を受けた広元が雅経と連絡を取ってなされたものと思われる。雅経夫妻には生年未詳の教雅・教定⁽³⁸⁾ があり、承久三年（一二二一）の雅経死後⁽³⁹⁾ も鎌倉との所縁をもち続けた。

雅經室は京都にあつては「関東三条」と呼ばれていた。「関東」の称が父広元に由来する事は疑いない。安貞元年（一二二七）八月には栗田口で死去したとの虚言があつたが、定家は「恣拳卿相」⁽⁴⁰⁾ げるなど「末代任意之女」と評している。正治二年（一二〇〇）十一月の童による月触観覧では「広元童女等每事華美殊勝」⁽⁴¹⁾ であつた。その装束も広元の逃えだろ⁽⁴²⁾うから、雅經室は童女の頃から父の権勢に浴していたのである。雅經室の権勢の背景にはもうひとつ彼女が仕えた卿二位高倉兼子と彼女の女婿高倉範茂が挙げられる。広元が源通親と近い関係にある事は既に指摘されている。さらに高倉範兼女子が通親に嫁し、また通親養女在子を後鳥羽天皇入内させてのち土御門天皇を得、範子妹兼子（卿二位）を乳母とした。一方範兼弟範季の女子重子が後鳥羽天皇との間にのちの順徳天皇を得るが、重子の同母弟が範茂である。承久の乱で後鳥羽一順徳ラインに立つ範茂を女婿とする雅經室は乱後恐懼する事となつたが、雅經室の権勢は、上洛して公家に嫁した御家人女子としてその権力関係が前面に出た象徴例であらう。死去の虚言が出た頃の雅經室は鎌倉にあつた。しかし寛喜二年（一二三〇）八月、彼女は京都で死去する⁽⁴³⁾。この頃には不和となつた二男教定と鎌倉で別れ、「無憑」一男教雅について定家に歎き伝えて⁽⁴⁴⁾いる。彼も病を得たのであらう。雅經室は雅經の死後も再嫁する事なく、最後まで公家の妻室として母として京都に死去したのである。滋野井実国に広元女子が嫁した事に基づく展開は所生の子もなく不明である。実国には藤原俊成女子との間に得た阿野公佐がいる。公佐は前述のように阿野全成女子を妻室としており、そこでの広元の干与を可能性としてはみ⁽⁴⁵⁾る。

徳大寺公国と広元女子との子実光は建仁元年（一二〇一）の誕生である。『明月記』正治二年（一二〇〇）十一月十四日条に「今夜公国五節所可持成之由有内府命云々、⁽⁴⁶⁾（源通親）⁽⁴⁷⁾故也」とあり、翌十五日の童月触観覧では「公国童」⁽⁴⁸⁾がみえる。この月触観覧には前述したのちの雅經室もみえる。公国の子で⁽⁴⁹⁾のちに北条義時女婿となる実春は、広元女子を生母とすると考えられる。広元が建久三年（一一九二）に拝領した肥後国球磨郡永吉預所職につき、嘉

禄元年（一二二五）六月の広元死去に伴いその跡職を実春が継いでいる。⁽⁴⁶⁾

⑰源雅具―中原師員女子

中原師員は嘉禄元年に設置された幕府評定衆のひとりである。源雅具は雅兼流村上源氏であるが、通具の猶子となっている。⁽⁴⁷⁾ 雅具は文暦二年（一二三五）の春までは鎌倉にあり、鎌倉にて師員女婿となり三月二十五日以前に上洛している。⁽⁴⁸⁾ この婚姻は鎌倉に下向した公家がかの地で御家人の女婿となった例であり、その上で武家女子が両親を鎌倉に残して公家妻室として上洛した例でもある。夫妻同道での上洛であっただろう。『明月記』は雅具につき近年師員の聳となつて「境」を得る事極まりなしとし、春の上洛には数百の勢を同道したとしている。⁽⁴⁹⁾ 数百の勢が事実かはともかく、雅具は幕府の文士の大物師員の女婿となつて極まりなき最高の境遇を獲得し、その威勢も止るを知らなかった。

⑱藤原基氏―大友親季女子

⑲嵯峨院―大友親季女子

⑳二条良実―大友親季女子

㉑資基王―大友親季女子

大友氏は建久末に鎮西奉行となつた中原親能を祖とする。親能は中原広季の子で大江広元の兄弟とされるが、藤原光能と広季女子との子で、外祖父広季の猶子となつたともいう。⁽⁵⁰⁾ 親能の猶子となつた秀郷流藤原氏の能直が大友を称し鎮西奉行を継ぎ、貞応二年（一二二三）に京都で死去し、親秀が奉行職を継いだと『吾妻鏡』はしている。⁽⁵¹⁾ 親秀女子の婚姻例は「大友系図」⁽⁵²⁾ によるもので、傍証が得にくくその全てを事実とする事は慎重にあるべきである。藤原基氏には西園寺実宥室公経母があり、親幕を想定しうる。『尊卑分脉』では庶子基宥の母を家女房としているが、「大友系図」には基氏室基宥とする親秀女子がいる。二条良実は九条道家の子で、「大友系図」は良実妾とし

て親秀女子をあげ、三井長吏となつた大僧正道瑜の母とする。伯資基王室の親秀女子は資緒王・資顯・康仲を得たとする。三人は同母で『公卿補任』は康仲の尼付に親秀女子を母とする旨がみえる。後嵯峨院妃齋宮愷子内親王母とする親秀女子がある。「本朝皇胤紹運録」に二条局の名を残す。この親秀女子の生母は水無瀬親兼女子で、元は源通親子通光室であつたことが『尊卑分脉』にみえる。武家女子が公家に嫁す場合、せいぜい大臣クラスまでで、院宮に入つたり、摂家に嫁す例は他にない。なお親秀女子には他に「権中納言敦兼卿室」がいるが、中納言敦兼なる人物が確認できず、これは誤りが確実である。

②二条道平―菊地時隆女子

これは「菊地系図」にあるもので、「二条関白道平公妻／道直并女御ノ母后ナリ」として、さらに女子の子として、「女后後醍醐院女御」をあげている。『尊卑分脉』にはふたりの名はない。時隆の弟武時は時隆の横死により家督を継いだが、後醍醐天皇に付き、元弘三年（一三三三）博多で討死したという。

以上本章では鎌倉期の公武婚のうち、武家女子が公家に嫁したパターンで武家側が非北条氏の例をみた。史料上の制約が厳しく、事例の指摘に留まらざるを得ないものも少なくないが、本章の最後にパーセンテージの面で注目したい点をあげておきたい。ひとつには武家側が清和源氏である場合が多いという事である。有力とされる御家人には秀郷流藤原氏や桓武（板東）平氏の末葉も少なくない。その中で文治四年の六受領につながるような源氏諸氏とりわけ足利氏が多い事が留意される。また大江広元などの京下り官人、文士にも目を向けておきたい。次章では武家女子が公家に嫁したパターンで武家側が北条氏の場合をみたい。なお、湯山学氏は持明院家定の子基盛の生母を幕府政所執事二階堂行頼とするが、『尊卑分脉』では基盛の生母を「隠岐守行頼女」とし、国史大系本同書「索引」は彼女を二階堂行頼女子とは認めておらず、本稿では留保する事とした。

第二章 武家女子が公家に嫁した例Ⅱ

— 武家側が北条氏の場合 —

武家側を北条氏とする公家婚の事例は、検出される限りで全体のほぼ半数を占める。ところが全て北条氏の側が女子を公家に嫁がせているのであり、北条氏が公家女子を妻室とした事例はない。表2はその一覧である。

②③ 三条実宣—北条時政女子

②④ 藤原国通—北条時政女子

②⑤ 松殿師家—北条時政女子

②⑥ 坊門忠清—北条時政女子

北条氏は、周知の通り時政女子政子が源頼朝の妻室となり、以後その所縁を以て時政が初代京都守護、執権となつたのをはじめに幕政を掌握していった。時政には公家に嫁した女子が四人いる。時政には伊東祐親女子との間に政子や義時・時房らの子があるが、公家に嫁した女子はいずれも藤原宗親女子牧の方の所生である。^{②⑥}

『明月記』元久元年（一二〇四）四月十三日条にみる「祭除目」で、定家は牧の方所生北条政憲につき「平時政子、実宣中将妻兄弟、近代英雄也」としており、実宣婚の成立はこれ（実宣二八歳）以前となる。『明月記』建保

元年（一二二三）八月二十五日条は「其妻時政女、已称猶子之由、存聶君之好云々」とあつて、実宣は時政女婿となつたのちに時政猶子となっている。実宣室は同年十月に男子を平産したが、その名は明らかでない。同四年三月二十二日に京都で彼女は死去した。^{②⑧} 嘉禄二年（一二二五）六月三日に定家は実宣の藤原盛兼婿取りに寄せて、「壮

年中^{正四位下、}為関東^{時政朝臣、}聶^{国通卿}弟也、以家地与卿二品、越上藤四人補藏人頭、任参議、歴大理職、昇納言、預分憂^{豊後、}

とし、婚姻を権勢獲得の具とする実宣の出世に時政女婿となつた事によるいわば成果を列挙する。前述のように定

家は為家の妻室に有力御家人宇都宮頼綱女子を迎えているが、彼はそれが実宣を手本にしたものである事を吐露している。⁽⁵⁹⁾

藤原国通室時政女子は平賀朝雅旧妻である。従つて、国通婚成立は元久二年（一二〇五）閏七月の朝雅事件以降となる。朝雅は建仁三年（一二〇五）十月に上洛し、以降朝雅事件で討たれるまで京都守護として在京しており、国通室もこの頃から在京していたに違いない。国通は建保七年（一二一九）の將軍実朝右大臣任官拝賀鶴岡参社参列のために下向しているが、実朝殺害を目にしたのち帰洛する。元仁二年（一二二五）二月、国通は病悩危急の容体となつたが、「妻室自去年在伊豆未帰洛」という。⁽⁶⁰⁾「伊豆」とは北条氏本貫の伊豆国北条を指すと思われる。朝雅事件で失脚した時政・牧の方はかの地に送られており、国通室もここで成長したに違いない。国通室の里帰りである。この翌年十一月には牧の方は上洛する。⁽⁶¹⁾国通室が同道したかは不明である。嘉禄元年（一二二五）六月二十七日に流れた近々の除目の情報では国通については「関東拳状」ありという。⁽⁶²⁾同二年十月には定家は室町殿で国通と会い、国通は「日来在関東」という。⁽⁶³⁾定家は国通を右の実宣と同様に為家婚の習いとした。⁽⁶⁴⁾同三年正月、先の朝雅事件で失脚したはずの牧の方の催しにより国通の有栖川亭にて時政十三年忌が挙行された。『明月記』同月二十三日条は「今日遠江守時政朝臣後家^{牧尼}、於国通卿^聲、有巢河家供養一堂、^{十三年忌}、宰相女房并母儀^{宇都宮人}、^{日云々}、宰相女房并母儀^{道頼綱妻}、昨日向彼家、享主語、公卿宰相招請殿上人、公卿直衣、殿上人束帶、一長者前大僧正導師云々、関東又堂供養云々、余慶照家門敷」と記す。思うに、故時政と牧の方は朝雅事件で失脚したのちのある時点で罪を免されていたのではないか。また時政女子は事件の責任を問われる事なく、おそらく政子辺りの尽力で国通への再嫁を果たしたのではなからうか。寛元二年（一二四四）四月、故義時孫女富士姫が国通猶子となるため上洛する。⁽⁶⁵⁾富士姫の実父が分らないが、外孫であればそれは後述の一条実雅以外にない。実雅室義時女子は承久四年（一二二二）二月に女子を平産して⁽⁶⁶⁾おり、この女子が貞応三年（一二二四）の実雅事件（伊賀氏の乱）⁽⁶⁷⁾後に唐橋通時に再嫁した実雅室から切り離されて北条

氏の下に養育を受けていたならば有り得る所である。

松殿師家に嫁した時政女子は、実は宇都宮頼綱室で、『明月記』天福元年（一二三三）五月十八日条に「金吾縁者（藤原為忠） 於天王寺為入道（松平朝宗）前摂政妻之由、態告送女子並本夫許云々、自称之条言語道断事（頼綱室女四十七）歟」とある。頼綱室は京都にて公家の妻室となつた自身の姉妹や所生の子藤原為家室を目の当りにし、自らも公家の妻室になりたいという思いを押さえ切れず、おそらくは天王寺詣での際に交際をもつた、前摂政という最高の格式を有する師家の許に走つたのではなからうか。

坊門忠清は坊門信清の子で、姉妹に將軍源実朝室がある。忠清は元久元年（一二〇四）十二月の信清女子の実朝との婚姻による鎌倉下向に同道したが、程なく帰洛したとみられ、以後鎌倉に下る事はない。従つて忠清に嫁した時政女子は上洛したことになる。忠清の鎌倉逗留時に結ばれたといえなくもないが確証はない。將軍家外戚となつた坊門家に所縁を得ようとした北条氏の戦略という他はないが、忠清はのち承久の乱の首謀者のひとりとなる。

②⑦ 一条実雅——北条義時女子

②⑧ 土御門定通——北条義時女子

②⑨ 唐橋通時——北条義時女子

③⑩ 西園寺実有——北条義時女子

③⑪ 藤原実春——北条義時女子

③⑫ 一条能基——北条義時女子

北条氏と公家との婚姻といえ、とかく牧の方所生の時政女子が説かれ、その理由も牧の方の公家指向に一元化されがちである。しかし義時についていえば六人の女子が公家に嫁している。

一条実雅は源義朝女子を室とした一条能保の三男だが、生母は家女房藤原家恒女子で、西園寺公経猶子でもあ

る。⁽⁷⁰⁾ 実雅婚は、鎌倉に居住し將軍に仕えた公家と武家女子との婚姻事例として、武家女子が上落して公家に嫁した事例の前述為家婚と併せて既に述べる所があり、⁽⁷¹⁾ 詳細はそれに譲るが、重複は避け得ないものの要点を押さえておきたい。

実雅は建保六年（一二一八）六月の將軍実朝右大臣任官拝賀鶴岡参社、同七年正月の同じく右大臣任官拝賀鶴岡参社参列のため鎌倉に下向している。両拝賀にはそれぞれ殿上人一〇人が供奉し、共に内五人が信能・実雅・頼氏・能氏・能継の一条家であった。

承久元年（一二一九）七月、右大臣任官拝賀の場で殺された実朝に替わる次期將軍として九条道家の子三寅（頼經）が下向する。この時殿上人として唯一供奉したのが実雅である。同年十月、実雅は執権義時の女子を嫁娶る。この女子は嫡子義時とは異母姉妹で、政村・実泰と同じく伊賀朝光女子を生母とする。この時義時大藏亭の「傍」に居所を与えられた。

鎌倉での実雅は三寅の守役というべき役回りであったが、各儀礼では常に三寅に「公家」として近侍し、序列も義時・泰時の上位に置かれた。しかし決して將軍・御家人体制の中に包摂されるのではなく、実雅は三寅に仕えつつもこの体制の外部に位置した。実雅には京畿より義時や尼御台所政子への口添え依頼が持ち込まれる事もあった。これは鎌倉における実雅の序列と位置、さらには義時女婿という幕府最高権力者との所縁によるものであろう。

貞応三年（一二二四）正月六日、実雅は義時大倉亭を訪れた。『吾妻鏡』同日条は「宰相中将来臨前奥州御館、
（一条実雅）

（北条義時）

今年初度也、亭主被引馬、其外物巨多云々」と記す。実雅は前年十月の臨時除目で二八歳にて従三位となり、従前の参議に加え、位階の上でも公卿としての格式を整えていた。右の『吾妻鏡』の表現は実雅と義時との絶対的な貴賤関係を示している。義時は女婿実雅が公卿である事に何らかの意義を見出していたのではないか。それを私は天皇權威による將軍權威の莊嚴と考えている。だがその天皇權威も実雅には諸刃の劍となる。それが伊賀氏によると

される実雅將軍擁立陰謀事件（伊賀氏の乱）であつた。⁽⁷¹⁾

土御門定通は幕府草創期の朝廷側の実権を掌握した源通親の子である。定通室義時女子は北条重時同母で比企朝宗女子の所生、承久の乱で後鳥羽上皇に与同した大江親広の旧妾竹殿である。竹殿は乱の前年承久二年（一二二〇）に定通との間に顯親を得ており、彼女はこれ以前に親広と離別して定通に再嫁したのである。定通亭は京都一条万里小路に所在し、定通室は「父義村」⁽⁷²⁾のために毎年八講を修しているという。⁽⁷³⁾安貞元年（一二二七）十一月には「一条禅門女」定通室が死去しているから、竹殿は復数いた定通室のひとりにすぎない。

定通の北条氏との所縁が説かれるのは、仁治三年（一二四二）正月以降の皇位継承問題で、九条道家が推す順徳上皇皇子忠成親王を退け、定通が推す土御門上皇皇子阿波院宮邦仁親王（後嵯峨天皇）が三月に即位した事につき、既に正月十七日段階で道家の側近平經高の日記『平戸記』に「談世事、阿波院宮依武士縁、一定御出立之由、世以風聞、件縁者、前内府言通妻者泰時・重時等姉妹也、如此之間、私差遣使者於関東、有慇懃之旨云々」とある事である。当時泰時は執権、重時は六波羅北方であり、定通は特に重時とは妻室を介しての「一腹之好」⁽⁷⁴⁾をもっていたという。

唐橋通時の嫁した義時女子は前述の一条実雅旧妻で、『明月記』嘉祿元年（一二二五）十一月十九日条に「実雅卿旧妻近日入洛、可嫁通時朝臣云々、義村為知行庄之地頭、年来不被訴、心操為上郎由成感、有此婚姻之儀云々、竊案、義村八難六奇之謀略、不可思議者歟、若依思孫王儲王用外舅歟、」と記している。通時は源通親同母弟通資の子である。通時室はおそらく実雅事件ののち離別の処置がとられたのであろう。彼女の上洛は実雅越前配流の二〇日後の事であつた。三浦義村は執権泰時を女婿とし、その関係で通時室の「外舅」とされたのであろう。政子・義時は既に亡くこの婚姻には干与していない。定家に従えば、通時の所領が義村の支配下にあるものの滞りがちになっているので、義村の「上郎」気取りを利用して婚姻を結んだ所領対策としつつも、他方で室が女子を得てそれを

入内させ、「外舅」義村の力で孫王を儲王にさせる疑念もあるという。

通時は嘉祿三年八月以前、前述の雅經室の女子高倉範茂室が原因で解官し、のちに鎌倉に下り、寛喜三年（一二二九）七月に「雖在閑東、於其前途者不可依昇殿、當時不出仕人仙籍無要由」で除籍となった。⁽⁷⁶⁾ 天福元年（一二三三）十一月閑東にて死去、安嘉門院に仕えていた通時女子も急ぎ退出した。⁽⁷⁷⁾ この通時女子が義時女子所生かは分らないが、定家は通時の死去を「運之拙非人力事歟、大臣孫、大納言三男也、五十余、為義時婢、而義村頻拳、遂不仮公卿之名、可悲事歟」とした。⁽⁸⁰⁾ 義村は通時を義時婢の縁により、叶わなかったとはいえ公卿への推挙を行い続けたのであった。通時室は左中将従四位上の通清を生み、曾孫通春は「住閑東」という。⁽⁸¹⁾

西園寺実有は西園寺公経の子で、実氏の異母弟である。『明月記』安貞元年（一二二七）二月八日条は「今夜三位中将実有卿、於無舍小路^{時々相国居住給家也}、実清入道宅迎新妻、実雅卿妻之弟也、母儀去年入洛競望之婢中武州可許云々、羽林幸運之来時歟、^{家嗣卿依此事去妻云々 忠信卿女也}、具実又懇望云々、但頗以前事歟、尤可慎向後哉、下人等云、尼二品慶賀喜悅由、自讃自愛、相親之輩称慶事、備饗膳儲引出物、群集云々」と記す。既に政子・義時は亡く、「尼二品」とは下人の誤言であろう。実有婚は、義時女子生母が上洛して婿を募り、競望の中で泰時が決定したという。この時大炊御門家嗣が妻室坊門忠信女子を離別して競望に加わっていた。大炊御門は家嗣曾祖父経宗以降、西園寺家も実有曾祖父実宗以降大臣に列しており、当時摂家に次ぐ格式が形成されつつある中での高いレベルの競望であった。実有室生母は不詳。実有室は正二位大納言公持、同公藤を得た。⁽⁸²⁾

藤原実春の妻室については北条泰時女子を挙げるものもあり、混同している。⁽⁸³⁾ 実春は前述のように徳大寺公国と大江広元女子との間の子と考えられ、広元の肥後国球磨郡永吉預所職を継いでいる。

一条能基は後述のように一条頼氏と北条時房女子との間に生まれた一条家嫡子である。⁽⁸⁴⁾ 能基は正嘉元年（一二五七）から文永二年（一二六五）にかけて將軍祇候公家として確認できる。⁽⁸⁵⁾ なお同母弟能清の嫡孫実遠は三浦氏から

出た佐原一族眞野宗連の先妻を妻として延慶元年（一三〇八）に関東で死去しており、公武婚の一例とみて間違いないだろうが、実遠室の出自不詳につき本稿では留保しておきたい。

③③ 一条高能―北条時房女子

③④ 一条頼氏―北条時房女子

③⑤ 藤原実任―北条時房女子

一条高能は一条能保と源義朝女子との子。源頼朝の甥である。高能には槽谷有季女子との間に能氏を得ている。ところが時房は安元元年（一一七五）の生まれであり、建久九年（一一九八）九月に二十三歳で死去した高能と同年である。従つてこの婚姻が高能の嫡子頼氏との混同とみる余地もあろう。この婚姻が事実とすれば、時房女子は幼年にて父と同年の高能に嫁した事になる。北条氏と一条家との婚姻は源家と一条家との姻戚關係に割り込んだものという他はない。

一条頼氏は承久の乱において一条家庶子の多くが後鳥羽院方に与同したのに対して、「独不忘旧好」鎌倉に馳せ参じている。⁽⁸⁷⁾

時房女子のひとりに「中納言実任卿」に再嫁した大江広元子長井時広旧妻がいる。実任は『尊卑分脉』中ふたりいる中納言実任のうち、年代上西園寺実宗同母弟実明の嫡孫である事に疑いない。この婚姻についての経緯・経過は不明である。なお実任には『吾妻鏡』天福元年（一二三三）六月十二日条に武家掇で次の事件が記されている。去る十一日に京中で実任は実宗嫡子公経の祇候人と出会い、下馬を命じたが、これを拒否した公経祇候人を実任青侍が欄躍するという事があり、公経は実任の放氏・解官を奏聞したが、下手人については「淡路国武士」であるので武家の沙汰とすべきとされ、この旨を記した六波羅北方重時の書状を執権泰時が披露した。ここでは武士は全て幕府の下に編成されているという朝廷の武士認識をみる一方で、そうした武士が公家の青侍になっている事を明ら

かにしている。

③⑥ 藤原実春―北条泰時女子

北条泰時は義時嫡子である。この婚姻は義時女子と混同している。^{⑧⑧}

③⑦ 源通俊―北条朝時女子

③⑧ 源具親―北条重時女子

北条重時は泰時・朝時の弟で朝時とは同母である。建保三年（一二一五）の生まれで寛喜二年（一二三〇）三月から宝治元年（一二四七）七月まで六波羅北方の任にあった。源具親は元久二年（一二〇五）に成立して承元四年（一二一〇）頃までの追加・削除が行われた『新古今和歌集』入集歌人であり、重時より年長者である。従って重時女子は父より年長者の嫁した事になる。父より年長者に嫁する例は珍しくはないが、やはり違和感を禁じえない。しかし具親婚は確実な事例であり、生年未詳の輔通を得ている。嘉祿二年（一二二六）十一月の除目で輔通が侍従となり、定家はこれにつき「具親朝臣子、朝時同母弟、関東拳状、申相国云々」と記している。^{⑨①} 輔通の侍従補任は、朝時同母弟重時の「関東拳状」を西園寺公経が上申した事によるのであった。天福元年（一二三三）十二月の除目聞書では輔通弟輔時が侍従に補任された。定家はこれにつき「具親朝臣次男、朝時猶子、去夏成功申少将由、入道語之」^{⑨②}としており、輔時は朝時の猶子となっていた。嘉禎三年（一二三三）三月、輔通の中将所望を「関東」が上申する。^{⑨③}

具親と重時との交流を示すものとしては『明月記』嘉禎元年二月十四日条の「具親入道以重時行向前黄門許、訴候者事柿本事不知由答、置歌帛云々、至極之僻人歟、駿州勅撰地頭殊異他歟」を挙げる事ができる。重時は歌人であり、在京中和歌を通じて具親と交流をもっていた。おそらくその交流の中で所縁を得たのであろう。輔通子通俊は朝時女婿となり、輔時曾孫親輔は「住関東」した。^{⑨④}

③⑨ 唐橋通時―北条実泰女子

④⑩ 九条忠嗣―北条実泰女子

④⑪ 唐橋通清（「雅世」）―北条実泰女子

北条実泰は北条義時の子で、生母は伊賀朝光女子である。^{④⑪} 従つて唐橋通時は、実泰同母一条実雅旧妻と実泰女子のおば―姪関係にあるふたりの女子を妻室とした事になる。

九条忠嗣は九条家嫡流関白忠家の庶子である。建治元年（一二七五）六月に四十七歳で死去した忠家の遺誡草案は、「一、九条一流不可被見放関東事」の条を立て、松殿師家が源義仲算として七歳の時に義仲推挙にて内覧となつた事、九条良経と源義朝女子所生の一条能保女子との婚姻を「都鄙合体」とする等々の上で「凡九条一流撰関職于今不絶之源、起自関東推挙」とし、「所詮、当流立身之起、依関東招之之推挙也」とする。^{④⑫} 忠嗣と実泰女子との婚姻を忠嗣の将来を見据えた忠家の配慮とみておきたい。

この他実泰には「雅世朝氏妻」と記された女子が挙げられる。姓未詳とされているが、「雅世」とは通時と義時女子（一条実雅旧妻）との子通清の本名とみるべきだろう。^{④⑬}

④⑭ 飛鳥井教定―北条実時女子

④⑮ 飛鳥井雅有―北条実時女子

北条実時は北条実泰嫡子、金沢文庫の創設者であり、鎌倉幕府随一の知識人である。飛鳥井教定は飛鳥井雅経の二男で、生母は兄教雅と同じく大江広元女子である。教定は嘉禄元年（一二二五）八月の北条政子の葬儀に布施取りとしてみえるを始めに藤原頼経・藤原頼嗣・宗尊親王の三代の將軍に近侍する事となる。嘉禄二年正月一日の新造御所での執権泰時沙汰による堀飯では教定が頼経の御簾上げを行い、寛喜三年（一二三一）正月九日の頼経鶴岡参社では頼経の車側に付く。^{④⑯} 母広元女子は安貞元年（一二二七）頃は鎌倉にあったが、寛喜二年（一二三〇）八月

に一男教雅の「無憑」を歎じながら京都にて死去する。この頃教定は母と不和であり、おそらく兄教雅との関係が因のひとつとなっているのではないか。

仁知三年（一二四一）に雅有が生まれる。ところが実時は元治元年（一二二四）の生まれで、この時十八歳であり、年齢関係上は後述の雅有婚との混同を指摘せざるを得ない。建長四年（一二五二）五月には新將軍宗尊親王の方違本所として、御所の北方亀谷泉谷の教定亭が定められ、新造が始められた。^⑩ 教定について知られる事績をひとくちでいえば將軍に近侍し、家業である和歌・蹴鞠師範として鎌倉において宮廷文化を領道したという事になる。雅有婚との混同問題も含めて教定と実時の交流の具体像は明らかでないが、両者の接点としてその学問・教養を求める事は許されよう。

雅有婚を教定婚と混同したものとすれば、年齢関係上雅有婚を事実とみなし、教定婚は退けるべきものと考ええる。雅有もまた父教定と同じく和歌・蹴鞠の業をもつて將軍に仕える事になる。雅有の頃には雅経兄難波宗長の子宗教も鎌倉に下向し、雅有同様の任を得て両者は「二人長者、根元雖受一流之口伝、枝葉勘出両様之故実者歟、^⑪」といわれる程対立する事になる。教定は文永二年（一二六五）四月に鎌倉にてその一生を終えたが、雅有は前年の冬に上洛したと考えられ、以後京都と鎌倉を往復する事となる。朝廷に仕えつつかつと同様鎌倉にも仕えるのである。雅有は鎌倉を「ふるさと」と呼ぶ。現代ではこの言葉にはノスタルジーが込められているけれども、雅有の言にその思いを求める事には慎重でなければならない。弘安三年（一二八〇）、雅有は六月に「下へきよし」の「かまくらより使」を受け、十一月に出生、雅有は下着し永福寺の僧房にあつて「年ころすミなれし故郷ハやけてかゝるところにきぬれハ、あらぬ世の心地して、いとミやこのミ恋しきこといはんかきりなし」とした。水川喜夫氏はこれを雅有の二重籍の桎梏とする。^⑫ 雅有は頭官栄職による栄達を願ひ大覚寺・持明院両統に出仕した。しかし雅有は鎌倉に下る。それは幕府が將軍儀礼への参列という公的役割を求めたからであり、それを拒み得ないからである。

二重籍論は朝幕関係の評価の上に判断すべきもので俄かには従えないが、雅有から朝幕関係をみる途もあるのではなからうか。

④④ 藤原実直―北条時村女子

④⑤ 藤原公直―北条時村女子

北条時村は北条政村の子。建治三年（一二七七）十二月から弘安十年（一二八七）八月にかけて六波羅北方を務める。時村女子は「実直卿室、後嫁公直朝臣」という。^{④⑥}藤原実直は公卿に限れば阿野公佐と阿野全成女子との子という事になる。なお前述徳大寺公国の曾孫とすれば、この実直には公直という子があり、^{④⑦}時村女子は父子に嫁したことになる。

④⑥ 唐橋通清―北条為時女子

唐橋通清は前述唐橋通時の子である。北条為時は前述の時村の子だが、時村に先立ち弘安九年（一二八六）に二歳で死去した。おそらく時村女子・為時女子の婚姻は、時村女子在京中に時村が主導したものでだろう。

④⑦ 藤原光氏―北条時盛女子

北条時盛は北条時房の子で、貞応三年（一二二五）六月から仁治三年（一二四二）正月にかけて六波羅南方の任にあった。また藤原光氏の父藤原光親は、妻室を順徳院乳母藤原定経女子経子とし、生母未詳の女子満子も順徳院乳母となっている。光親は承久の乱の張本のひとりとして斬殺された。乱の年時盛は二十五歳であり、光氏婚は乱の影響も考慮したいが、時氏婚は光盛在京中の事であろう。^{④⑧}時盛女子は山門僧頼憲を得た。

④⑧ 葉室定藤―北条時親女子

北条時親は時房流で、時盛の子とも時貞（時盛弟朝直の子）の子ともいうが、^{④⑨}以下の事を勘案すると前者が妥当と思われる。葉室定藤は藤原光親と経子との子葉室定嗣を父とする。^{④⑩}時盛・時親父子は何らかの事由を以て光親流

と結んだのであろう。定嗣兄光俊は承久の乱により流罪となり、帰京ののち後嵯峨院の下歌人真観として復権し、正元元年（一二五九）の院宣による『続古今和歌集』の選者に加わる。真観の門人には將軍宗尊親王があり、「続古今和歌集」入集歌人のうちもっとも多く、作歌の入集をみている。その他北条氏の入集歌人には重時の子の時茂・義政、時盛の弟時直、そして時親がいる。文応元年（一二六〇）十二月、真観は京都より下着、「当世歌仙也」といわれ、和歌興行を盛り上げた。文永二年（一二六五）十月にも京都より下着しているから、歌集選歌と並行して鎌倉にあつて宗尊親王時代を最盛期とする鎌倉歌壇を領導していったのである。その『続古今和歌集』もこの年に成立した。

④⑨ 洞院公守―北条久時女子

⑤⑩ 藤原公蔭―北条久時女子種子

北条久時は重時流の嫡流で、正応六年（一二九三）三月から永仁五年（一二九七）六月にかけて六波羅北方の任にあつた。洞院公守は西園寺公経の孫、父は洞院実雄で生母は法印公審女子である。龜山院民部卿局平親繼女子を妻室として実泰を得、龜山天皇と近い關係にあつた。公守の子実明は久時女子の所生とされるが、他方で高階泰勝女子の所生ともされる。実明が松殿兼嗣女子との間に得たのが公蔭で、公蔭は久時女子種子との間に元享二年（一二三二）に忠季を得た。また忠季同母姉妹に光嚴院妾があり、義仁親王を得ている。公守は従一位太政大臣に昇り、実明―公蔭―忠季三代も公守流庶流であるが正二位権大納言に昇つた。

以上本章では鎌倉期の公武婚のうち、武家女子が公家に嫁したパターンで武家側が北条氏の例をみた。やはり史料上の制約により事例の指摘に留まるものや『尊卑分脉』等による芋蔓式型人脈論に陥るものもなくはなかったが、最後に本章を通じて注目したい点をいくつかあげておきたい。時期の面では承久の乱（承久三年・一二二一）前後をピークとして鎌倉時代前半に多くみられる事である。次にパーセンテージの面でいえば、これは非北条氏の場合

とも干わるが、公家側を基とした場合に、公武婚を結ぶ一定のグループがあるように思われるのである。それはひとつには源通親に近い村上源氏であり、一条家や西園寺家といった親幕派藤原氏である。権力を巡る所縁作りとみるのは平凡であるが、改めて検討すべき問題と考える。

第三章 公家女子が武家に嫁した例

公家女子が武家に嫁した事例として表3の四例をあげる。既に小笠原長清が五条邦綱女子との間に、治承三年（一一七九）に「六波羅館」にて嫡子長経を得たとされているが、本稿では先行時代として取り上げなかった。また、將軍実朝に坊門信清女子が嫁した事例は、將軍家の婚姻として次章に置いた。

㊦水無瀬（坊門）親兼女子―大友親秀

水無瀬親兼は足利義兼女子を室のひとりとしているが、所生は確認されない。生母未詳のこの女子は源通光旧妻で、大友親秀に再嫁して斎宮祖母となった[㊦]。即ち所生の女子が嵯峨院宮に入り斎宮愍子内親王を得たのである。

㊧飛鳥井雅経女子―安達義景

飛鳥井雅経は前述のように大江広元女子を妻室として教雅・教定を得ている。この雅経女子の生母は不明だが、まずは広元女子だろう。所生の顕盛は寛元三年（一二四五）あるいは嘉禎元年（一二三五）の生まれである。雅経は承久三年（一二二二）に死去したが、雅経の跡を受け鎌倉にて和歌・蹴鞠の範となった教定は將軍宗尊親王が廃される文永三年（一二六六）まで鎌倉にあり続けた。顕盛の誕生はその間の事だから、雅経女子義景室は教定を親代わりに鎌倉に生まれ育ち武家に嫁したのである。『吾妻鏡』に康元二年（一二五七）から文永二年（一二六五）にかけてみえる顕盛は將軍儀礼等に与えられた役割で参列する一般御家人である。正嘉二年（一二五八）六月十一日の將軍宗尊親王最明寺入御に騎馬にて供奉した泰盛に対して顕盛は歩行にての供奉であった。これは寛喜三年

(一二三二) 生まれの泰盛が建長五年(一二五三)に死去した義景に替わる安達当主であり、顯盛は庶子にすぎなかったからであろう。雅經女子は他に長景・時景の二男子を確認する。いずれも従五位下にはなつたが、小笠原長清子伴野時長の女子を妻室とした正五位下嫡家泰盛に対して嫡庶の列を壊すものでない。教定は將軍宗尊親王に近侍して御簾上げをした。雅經女子は「城尼」¹⁵と呼ばれてそれなりの扱いを受けたであろうし、義景晩年には正妻(的存在)の位置にあつただろう。生母未詳の建長四年生まれの義景女子(北条時宗室堀内殿)の生母が雅經女子である事は可能性としては認められよう。しかし雅經外孫として公家の血を引くとはいえ、御家人の、しかも庶子として生まれた教定甥で雅經女子所生の男子三人は、自身や母、そして教定にその意はなかつたとしても、飛鳥井の權威を以て御家人秩序を乗り越える事はできなかったといえよう。

⑤源通親女子―三浦泰村

この婚姻は、宝治合戦で敗れた三浦一族の妻子搜索を記す『吾妻鏡』宝治元年(一二四七)六月十四日条の「泰村後家者、鶴岡別当法印定親妹也、有二歳男子」を初見とする。定親は東寺僧で、生母未詳だが源通親子である。

彼は寛喜元年(一二二九)六月鶴岡八幡宮寺社務となり、宝治元年六月の執権北条時頼が三浦泰村に仕掛けた宝治合戦の戦後処理で「鶴岡別当法印定親籠居、依為若狭前司泰村縁坐也」となつた。¹⁶通親女子は、通親が建仁二年(一二〇二)の死去であるから、同三年の生まれとしても四十五歳にて「男子」を得た事になる。年齢的には通親孫女を通親猶子としたとみるべきだが、「妹」に同腹の意を認める限りは定親と同腹といわざるを得ない。

泰村には景村以下を生んだ北条泰時女子が妻室としてあつたが、寛喜二年八月に二十五歳で死去し、後妻の泰時「妹」も嘉禎二年(一二三六)に早世した。この「妹」は異本では「娘」¹⁷であり、年齢的には「娘」であろうか。通親女子が泰時に嫁したのはその後であろう。しかし彼女も合戦の戦後処理で他の三浦一族の妻子と同じく落飾となり、さらに彼女に対しては「不可居住鎌倉中」とされた。¹⁸

ところで、宝治合戦後に泰村「後家」とされた者は通親女子のみであり、彼女は落飾後、合戦前六月五日に泰村に充てた時頼書状を返進している。この時頼書状は内容は不明だが、泰村が時頼より「存殊重宝之由、不可令紛失之旨」示され、到来より「護緒」を結び付けておいたもので、これを返進した通親女子は後妻とはいえ、泰村の正妻（的存在）であつたというよう。

⑤三浦景明―綾小路継宣女子

景明は佐原系三浦氏の族で、弘安十一年（一二八八）には大番勤仕のため在京している。妻は「綾小路小納言継宣」という。

以上本章では、公家女子が武家に嫁した例をみた。このパターンは前二章でみた武家女子が公家に嫁した例に対し件数上僅少であり、むしろ例外パターンといつても過言ではない。親兼女子は在京と思われるが嫡子生母ではない。雅経女子と通親女子は、何れも鎌倉にあつて御家人の正妻（的存在）となつたと考えられるが、嫡子生母ではなく後妻であり、しかも夫の死に直面した事まで共通している。従つて公家女子が御家人に嫁して嫡子を得たという例は検出できなかった。このパターンは類例に乏しく、以下に述べる事は見通しにもならないが、本質的に御家人は嫡子を得るために公家女子を妻室とするという発想自体がなかつたものと思われるのである。鎌倉での御家人間の政・戦争では姻族故の与同がみられる。姻族が何故にひとつのアクショングループを成す事を義務付けられるか、それ自体が研究課題として残るけれども、御家人の妻室は姻族結合の紐帯として期待され、嫡子を得る事により結束は一層強化される。そうした政略的観点からみて御家人社会にあつては、妻室は御家人女子を第一としたとみるべきであらう。また公家側からみれば、子女を御家人の妻室とするという事は、夫方居住のもと子女に武家暮らしを強いる事であり、子女を將軍家陪臣へ降ろす事でもある。公家社会では、女子は生家より高貴な出自の男子を夫とする例が多く、同様にこの頃の皇女も斎宮や出家の他は摂家降家が僅かにみられるにすぎず、後述の源頼

家女子も摂家將軍藤原頼經に嫁する他はなかったであろう。公家女子が御家人に嫁すという発想自体が公武双方において一般化していなかったものといえよう。なお、將軍宗尊親王生母棟子を出した高棟流平氏で、將軍守邦親王に勤仕した顯棟の姉妹が平賀藏人三郎妻と推定されているが、本稿では留保した。

第四章 將軍家の公武婚

鎌倉將軍家は、源家三代こそ武士の家であり、それは後世の室町幕府の足利氏、江戸幕府の先蹤となった。しかし四代・五代は摂家將軍であり、六代以降は親王將軍であつた。しかも摂家・親王將軍は出身家の属性をもち続け、依然として彼らは摂家一族、皇族であつたのである。將軍イコール武家である事に四代以降も変わりはない。本章では將軍家の公武婚として

⑤⑤ 坊門信清女子―源実朝

⑤⑥ 藤原頼經―源頼家女子竹御所

⑤⑦ 藤原頼嗣―北条時氏女子檜皮姫

の三例を挙げる。頼經・頼嗣は將軍である事を認めつつその上でこれを公家として取り上げた。藤原頼經は九条道家の子である。道家にとり頼經とその子孫は道家自身の末葉であり、一門である。^⑫これを個々の御家人なり機関としての幕府が否定しない限り、頼經・頼嗣は公家と武家の二側面を同時にもつ。源姓改姓問題は右大將家の系譜への接続と考えるが、現実には認められてはいないのである。

さて、『吾妻鏡』元久元年（一二〇四）八月四日条によれば、実朝は自身の嫁娶について、予定されていた足利義兼女子を退けて京都に求める事を主張したという。義兼は文治四年の源氏六受領のひとりで、義兼生母熱田大宮司藤原範忠女子は、源頼朝や一条能保室の姪である。家柄、姻戚関係共に義兼女子は実朝室として申し分ない環境

にある。一般的には京都への憧憬をもつ実朝の我意とされるが、比企の乱の経験から、御家人が將軍妻室となる事を避けたものとする見方が有力になっている。確かにこの頃の婚姻が、連帯の紐帯として利用され、当事者本人の意向を超えた所にあつた事は否定できない。しかし当事者本人が縁談を拒否する例は他にもあり、むしろ一般的でさえあるといつてよい。従つて『吾妻鏡』は事実を伝えているとみてよい。実朝の公家指向はこの頃には既に牢固となつたのである。とはいへ具体的な個人がある訳ではない。坊門信清女子が選出された経緯は卿二位高倉兼子の干与が傍証される他不明であるが、尼御台所政子と兼子との連携とみる他はないだろう。実朝婚は幕府の枠を超えて朝幕問題となつたのである。鎌倉には京都より坊門家使者が頻繁に派遣され、歌書・蹴鞠書等の文物が届けられ、⁽¹⁵⁾ 実朝の興に入れられた。また承元二年（一二〇七）の後鳥羽天皇南山臨幸にあたり、政子は自身の侍藤内秀康を派遣し、実朝室兄弟の忠信の供奉に扈從させるなど、將軍家と坊門家は鎌倉と京都にあつて親密な交流をもつた。こうした私的な交流とは別に建永二年（一二〇七）には坊門家より仁和寺御室令旨が届けられた。紀伊国土民等が高野山に乱入し寺領を押妨したが、その張本が守護代であつたので停止のために「関東御沙汰」を求め、さらに以後は守護代を置かず、「仙洞御計」としてほしいというのである。⁽¹⁶⁾ こうした問題が坊門家を介して幕府に持ち込まれた背景に坊門家と將軍家の姻戚関係をみる。この婚姻は京畿人をして坊門家を京都での幕府への窓口とさせ、坊門家もこれに応えたのである。坊門家は幕府を背景とした権勢家となつたといえよう。

実朝の死（建保七年・一二一九）後直ちに落飾した信清女子（本覚尼）は帰京し、幕府の援助を得て西八条第を与えられ、実朝菩提所遍照院とし、文永十一年（一二七四）に死去した。⁽¹⁷⁾

寛喜二年（一二三〇）十二月に成立した頼経婚は、頼経十三歳、頼家子女竹御所二十八歳の時のものである。⁽¹⁸⁾ 頼経は一条能保と源義朝女子頼朝姉妹との間の外孫九条道家と、西園寺公経と能保夫妻女子との間の子である。頼経について源姓改姓問題が起きた事は頼経に源家三代の継承性が求められたからであろう。後継選定にあたり右の所

縁は偶然ではなく意識されたものであろう。それを補強したのが二代將軍頼家の遺子竹御所であつた。

寛元三年（一二四五）七月に成立した頼嗣婚は、頼嗣七歳、北条時氏女子檜皮姫十六歳の時のものである。⁽¹³⁾ 頼嗣は頼経と家女房藤原親能女子との子であり、竹御所はそれ以前に死去した。檜皮姫の父時氏は北条泰時の子で父に早世したため執権には就かなかつたが、子に執権経時・時頼そして檜皮姫を得た。ときの執権は経時であり、北条氏は政子以来にして將軍家と再度姻戚關係を結ぶに至つたのである。しかし檜皮姫は宝治元年（一二四七）に死去した。⁽¹⁴⁾ 檜皮姫は頼嗣との間に「若君」を得たが、建長四年（一二五二）四月に頼嗣は將軍職を廃されて「若君」と生母親能女子と共に京都に送還された。⁽¹⁵⁾

以上、本章では將軍家の公武婚として右の三例をみた。それぞれ異なるパターンではあるが、全て將軍を巡る政略結婚である。しかも全て悲劇的結末を得るものであつた。姻戚關係が政治に影響力をもつ以上、政略結婚は権力闘争の上で効果的な策として繰り返されるのである。

おわりに

以上本稿は、これまでの日本中世史研究の上で死角に置かれていたのか、意義を認められていないのであろうか、あまり論じられる事のなかつた公家と武家との婚姻を「公武婚」とし、鎌倉時代のそれを通覧した。史料上の制約もあり、事例の指摘や芋蔓式型の人脈論に陥る場合もあつたが、以下繰り返すにはなるが、本稿のまとめとしておきたい。

公武婚には武家女子が公家に嫁すパターンと、公家女子が武家女子に嫁すパターンとがある。鎌倉時代では前者のパターンが通例であり、後者のそれは僅少で例外であるときえいい得る。時期的には承久の乱前後を盛期に鎌倉時代前期に多くみられる。パーセンテージの面で見れば、武家側が北条氏の例が全体の半数程を占め、非北条氏で

は清和源氏の例が目立つ。公家側を基とすれば、源通親に近い村上源氏が目立ち、所謂親幕派の藤原氏も目立つ。むろん右の傾向は偶然あるいは史料上の制約、さらには調査不足により現れたものにすぎないとの見方もあるかもしれないが、実数はともかくとしても傾向としては認めておきたい。こういった傾向は、それ自体何らかの由があつての事であり、その解明を目指さなければならないが、本稿は公武婚現象の呈示それ自体を目的としており、問題の指摘に留めておきたい。なお、『御成敗式目』二五条「関東御家人以月卿雲客為増君、公事足減少事」(貞永元年・一二三二)、延応二年(一二四〇)五月の追加一四四条「関東御家人、以雲客已上為増君、讓所於女子事」⁽¹⁸⁾が公武婚の多さを示唆するものである。

公武婚は公家同士や武家同士の婚姻とは異なる第三の婚姻型態「齊之婚」であり、これを個人・個別レベルに矮小化することには従えない。なぜ公武婚が行われるのか、これを論じることが中世国家史、延いては日本中世史研究に寄与するものと考ええる。

註

- (1) 金沢正大「鎌倉幕府成立期に於ける武蔵国々衙支配をめぐる公文所寄人足立遠元の史的意義」(『政治経済史学』一五六・一五七、一九七九年)、網野善彦「尾張国の莊園公領と地頭」(御家人制研究会編「御家人制の研究」吉川弘文館、一九八一年)。但し、金沢論文が対象とする藤原光能と足立遠元女子との婚姻は仁安元年(一一六八)以前の成立であり、網野論文も内乱期段階のもので、本稿が対象とする時代に先行するものとして収録対象としなかった。また網野論文は、東国人と西国人と
- (2) いう構想であり、必ずしも公家と武家の構図ではない。五味文彦「縁に見る朝幕関係」(『明月記研究』五、二〇〇〇年)。五味氏は北条義時女婿の例の中に平賀朝雅を挙げている。朝雅は京都守護として在京し、その間朝廷とも近くあつたとしても、朝雅は武家としておきたい。
- (3) 総合女性史研究会編『史料にみる日本女性のあゆみ』吉川弘文館、二〇〇〇年。
- (4) 九条良経は勿論の事、一条能保も公家であり、この婚姻は公家と武家の婚姻ではなく公家同士の婚姻である。しかし、ここで執行される婚姻儀礼は、良経父兼実が公

家の伝統的な簪取を主張したのに対し、能保は妻室の兄弟源頼朝の意向を受けて、鎌倉武士の進上式嫁取で臨もうとした。能保側は婚姻形式上武家側に立っていたのである。のち良経嫡流の曾孫忠家はこの婚姻を「將軍（源頼朝）（中略）以親族一条中納言能保卿女子（將軍妹腹歟）娶禪閣嫡子後京極殿（九条良経、自爾以降、彌至子孫之末、存都鄙合体之儀）（『鎌倉遺文』一一九二五号）とする。

(5) 諸橋徹次『大漢和辞典』。

(6) 拙稿「鎌倉前期ふたつの公武婚」（『鷹陵史学』二九、二〇〇三年）。

(7) 『尊卑分脉』。

(8) 北条氏研究会「北条氏系図考証」（安田元久編『吾妻鏡人名総覧』吉川弘文館、一九九八年）。

(9) この段階は『吾妻鏡』に拠る。

(10) 『吾妻鏡』元久二年十一月三・四日条、建保六年二月四日条。

(11) 『尊卑分脉』。

(12) 『尊卑分脉』。

(13) 『吾妻鏡』文治元年八月二十九日条。

(14) 田中稔「鎌倉幕府御家人制度の研究」吉川弘文館、一九九一年。

(15) 『日本史大事典3』（本郷和人「四条隆衡」）平凡社、一九九三年。

(16) 『尊卑分脉』。

(17) 『吾妻鏡』建長四年四月一日条。

(18) 『吾妻鏡』。

(19) 『公卿補任』。

(20) 高島哲彦「鎌倉時代の貴族の一側面」（『史友』一九、一九八七年）、湯山学「関東祇候の廷臣」（『南関東中世史論集』一、私家版、一九八八）。

(21) 『尊卑分脉』。

(22) 村山修一「藤原定家」吉川弘文館、一九六二年。

(23) 註(6)。

(24) 註(6)では為家婚を「御家人女子が上洛し公家に嫁した例」とした。在京人といっても、本貫が京畿にある場合と本貫は関東であるが所職を得てあるいは頼綱のように隠居の地として在京している場合とは本質的に違う。西園寺実有室の場合は母が婚獲得のために上洛した事によるもので、右引用の典型である。しかし為家室の場合は、仮に生まれを関東としても婿を求めての上洛ではないだろう。また彼女自身は京都生まれとしても、宇都宮氏は関東御家人であり、定家にもそうした認識はあった。従って定家流の公武婚機能論からは右引用は妥当のように思うが、結婚目的の上洛か否か、為家室の生まれは本当に関東かを考えると、撤回とまでは言わないが、幾分か適切さを欠くものであった。

(25) 高群逸枝「招婿婚の研究」一九五三年、講談社。（高群逸枝全集第二・三巻、理論社、一九六六年）。

(26) 『明月記』嘉禄二年六月三日条。

(27) 『群書類従』一〇和歌部。

(28) 石田吉貞「宇都宮歌壇とその性格」『国語と国文学』

一九四七年十二月号。

(29) 『吾妻鏡』 文治元年十二月六日条。

(30) 『尊卑分脉』。

(31) 註(27)。

(32) 『吾妻鏡』 正治二年正月一・二・三・四・五・六・七・八日条。

(33) 『吾妻鏡』。

(34) 『明月記』 建仁元年三月二十日条。

(35) 『吾妻鏡』 建暦三年八月十七日条。

(36) 『吾妻鏡』 建暦三年十一月二十三日条。

(37) 『明月記』 建暦三年七月二十四日条。この時の「草子」が註(35)の「双紙」であると考えられる。

(38) 『尊卑分脉』。

(39) 『公卿補任』。

(40) 『明月記』 嘉禄三年八月二十二日条。

(41) 『明月記』 正治二年十一月十五日。

(42) 杉橋隆夫「鎌倉初期の公武関係」『史林』54-6、一九七一年。

(43) 『明月記』 寛喜二年八月二十八日条。

(44) 『明月記』 寛喜二年三月五日条。

(45) 『明月記』 正治二年十一月十四日条。

(46) 『鎌倉遺文』一四八九八号。

(47) 『尊卑分脉』。

(48) 『明月記』 文暦二年三月二十五日条。

(49) 註(48)。

(50) 『尊卑分脉』。

(51) 『吾妻鏡』 貞応二年十一月二十七日。

(52) 「諸家系図纂」『大日本史料』5-27。

(53) 『群書類従』五。

(54) 『続群書類従』六上。

(55) 註(20)湯山論文。

(56) 杉橋隆夫「牧の方の出身と政治的位置」(上横手雅敬編『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年)。

(57) 『明月記』 建保元年十月十三日条。

(58) 『吾妻鏡』 建保四年三月三十日条。

(59) 『明月記』 嘉禄二年六月三日条。

(60) 元久二年閏七月十九日、清和源氏義光流の平賀朝雅を実朝に替えて將軍に立てようとする陰謀が発覚する。首謀者は北条時政室牧の方で、朝雅はその女婿である。時政は出家し、二十日、牧の方は伊豆国北条に送られ、二十六日、朝雅は幕命を受けた在京御家人により誅殺された(『吾妻鏡』)。

(61) 『吾妻鏡』 建保七年正月二十七日条。

(62) 『明月記』 元仁二年二月二十九日条。

(63) 『明月記』 嘉禄二年十一月十一日条。

(64) 『明月記』 嘉禄元年六月二十七日条。

(65) 『明月記』 嘉禄二年十月十三日条。

(66) 註(59)。

(67) 『吾妻鏡』 寛元二年四月十日条。

(68) 『吾妻鏡』 承久四年二月十二日条。

(69) 貞応三年閏七月三日、執権義時後室伊賀氏とその兄弟

伊賀光宗らによる、義時・伊賀氏の女婿一条実雅を將軍に立てんとする陰謀が発覚する。二十三日、実雅は京都に送還され、二十九日、光宗は政所執事職と所領五二か所を召し放たれ、さらに八月二十八日、義時後室伊賀氏は伊豆国北条に籠居となった。十月十日、実雅は越前国配流が決定し、二十九日配流、安貞二年五月十六日、去月二十九日に実雅越前にて死去の報が入る。〔公卿補任〕。「河死」という〔公卿補任〕。首謀者には「吾妻鏡」に従った通説の他に、家長権の世代交代に抗した尼御台所政子を挙げる説（永井晋「伊賀氏事件の基礎的考察」『国史学』一六三、一九九七年）がある。

(70) 『尊卑分脉』。

(71) 註(6)。

(72) 『公卿補任』。生年は公卿補任年齢から逆算。

(73) 『明月記』嘉禄二年六月十三日条。

(74) 『明月記』安貞元年十一月十三日条。彼女は堀川具実同腹、父堀河通具、生母法印能円女子後鳥羽院女房按察局。

(75) 『平戸記』仁治三年正月十七日条。

(76) 『平戸記』仁治三年正月十九日条。定通室と重時は同腹。

(77) 『明月記』嘉禄三年八月二十二日条。

(78) 『明月記』寛喜三年七月三日条。

(79) 『明月記』天福元年十二月六日条。

(80) 同前。

(81) 『尊卑分脉』。

(82) 『尊卑分脉』。

(83) 註(8)。

(84) 『尊卑分脉』。

(85) 『吾妻鏡』。

(86) 湯山学「鎌倉後期における相模国の御家人について」『鎌倉』二四、一九七五年。

(87) 『吾妻鏡』承久三年五月二十一日条。

(88) 註(8)。

(89) 『尊卑分脉』。

(90) 『明月記』嘉禄二年十一月五日条。

(91) 『明月記』天福元年十二月十六日条。

(92) 『玉葉』嘉禄三年三月二十八日条。

(93) 『尊卑分脉』。

(94) 註(8)。

(95) 『鎌倉遺文』一一九二五号。

(96) 註(8)。

(97) 『尊卑分脉』。

(98) 『吾妻鏡』。

(99) 「関東評定衆伝」『群書類従』四。

(100) 『吾妻鏡』建長四年五月十九・二十六日条、同年七月八日条。

(101) 『吾妻鏡』文応二年正月十日条。

(102) 水川喜夫「解説」(水川喜夫編「飛鳥井雅有日記」勉誠社、一九八六年)。

(103) 註(8)。

(104) この場合には公直は時村女子の所生ではないだろう。

(105) 宝治元年三月二十七日に時盛女子が六波羅北方重時の子長時に嫁すために上洛した(『吾妻鏡』同日条。このことから六波羅赴任は単身赴任ではなく、家族揃つての在京であつた事がいえる。

(106) 註(8)、『尊卑分脉』。

(107) 『尊卑分脉』。

(108) 『吾妻鏡』文応元年十二月二十一日。

(109) 『吾妻鏡』文応元年十二月二十三日。

(110) 『吾妻鏡』文応二年十月十八日条。

(111) 中川博夫「東国歌人と鎌倉」『季刊悠久』七〇、一九九七年。

(112) 『尊卑分脉』。

(113) 「小笠原系図」『群書類従』五下。

(114) 『尊卑分脉』。

(115) 『尊卑分脉』。

(116) 『吾妻鏡』寛喜元年六月二十五日条、宝治元年六月十八日条。

(117) 『吾妻鏡』寛喜二年八月四日条、嘉禎二年十二月二十三日条。

(118) 『吾妻鏡』宝治元年六月十四・二十五日条。

(119) 『吾妻鏡』宝治元年六月十五日条。

(120) 註(86)。

(121) 註(20)湯山論文。

(122) 『鎌倉遺文』七二五〇号。

(123) 頼朝女子は頼朝と政子が勧めた一条高能との縁談を「及如然之儀者、可沈於深淵」と拒否した(『吾妻鏡』

建久五年八月十八日条。また「武州之女嫁相州嫡男

へ四郎」依有愛妻「光宗女」頗固辞(『明月記』嘉禄二

年二月二十二日条)という例もある。

(124) 五味文彦「卿二位と尼二位」(総合女性史研究会編

『日本女性史論集2 政治と女性』吉川弘文館、一九九

七年)。

(125) 『吾妻鏡』元久二年三月十六日、建保二年二月十日、

同七月六日条。

(126) 『吾妻鏡』承元二年五月二十六日、同七月二十二日条。

(127) 『吾妻鏡』建永二年六月二十二・二十四日条。

(128) 細川涼一「源実朝室本覚尼と遍照院」(脇田晴子・S

・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史上』東京大学出

版会、一九九四年)。

(129) 『吾妻鏡』寛喜二年十二月九日条。

(130) 『吾妻鏡』寛元三年七月二十六日条。

(131) 『吾妻鏡』宝治元年五月九日条。

(132) 『吾妻鏡』建長四年四月三日条。

(133) 『中世政治社会思想上』岩波書店、一九七二年。